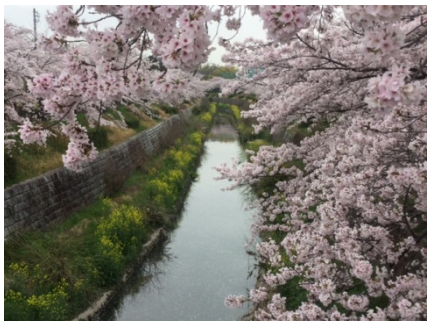
# 山崎川をゆく（3）

いま山崎川といえば、名古屋の桜の名所のひとつだ。雨を心配しながら、満開の桜を駆け足で見に行った。地下鉄「瑞穂運動場東」で降り、緑の丘の方に向かう。12 日レポートの藤原師長公が琵琶を弾じた「師長町」である。師長公「謫居の地」から、東へ 2 キロの丘にあたるところだ。こうして来てみると、なんだか師長公の気分に？



瑞穂競技場前を下ると、山崎川に出る。両岸には桜が咲き誇っている。前に紹介した『瑞穂区誌』から―現在名所として親しまれている桜は、昭和 3 年(1928)に耕地整理組合によって植えられ、第二次大戦後は花見でにぎわうようになり、一時は河岸に茶屋や屋台が並んだこともあった。

昭和 26 年(1951)からは瑞穂運動公園振興会が“納涼夏まつり”を開催、鵜飼なども行い、昭和 34 年(1959)ごろまで可和名橋（陸上競技場横）あたりには貸ボートもあった。昭和 51~53 年(1976~78)には、石川橋から可和名橋の間が「四季の道」として整備され、また昭和 63 年(1988)からはふるさとの川モデル事業がすすめられている。

平日午後だったが、なんとか雨の降らないまでにと、多くの人が歩いていた。きちんと整備された河岸には、家族連れの人たちが写真を構えていた。老人ホームからと思われる一団も。車いすの人たちなど、笑顔で桜をじつと眺めていた。

鼎橋の近くに、写真のような案内が。「昭和 3 年、石川耕地整理組合によって川の両岸に 500 本の桜を植えたのが始まりです。平成 2 年に財団法人日本さくらの会から「さくら名所 100 選」に認定され、全国的に有名な桜の名所となりました。特に木造で風情のある鼎小橋付近には，美しい花をいっぱい咲かせる老木が数多く残されています。」

（2017 年 4 月 14 日）